

自由学園初等部 5 年 学びの発表会 「食の学び 個からグループへ」

山崎 千佳

初等部 5 年は、食を中心に一年間のカリキュラムを組んでいる。社会科で、毎日の食卓に上る食品が、どこで誰によって生産され、どのように家庭まで届けられるのかを調べるところから食の学習が始まり、おいしくて安全な食材が、人々の努力と工夫によって作られていることを学んでいく。そして、4 年で学習した水、毎日世話をしている堆肥や土が、食にも大きく関係していることに少しずつ気が付いていくのである。総合では、校内の田んぼで半年かけて無農薬の稲作に取り組む。人手と時間を要する重労働である米作りの体験を経て、農業人口の減少、高齢化といった社会問題や、道具や機械の発明や発達について、実感を伴って考えることが出来る。二学期には、森林での体験学習を通して、林業と木や森、水と土、更に海と漁業や環境へと学びを広げていく。この例年の学習に、今回は、食をテーマにしたグループ学習を加えた。食物の生産以外にも、食に関係する仕事がたくさんある。そこには、どのような工夫や人々の思いがあるのだろうか。

I. はじめに

5 年が担当する掃除場所の一つに『堆肥』がある。校内から集められた草や落ち葉、生き物の糞を、係の子どもが水を入れたり掻き混ぜたりして、日々、堆肥を作る。全学年がその堆肥を使い、それぞれの畑で元気な作物を育てている。自分達で育て収穫した作物は、保護者が毎日のお食事の中に入れて調理してくださる。縦割りのテーブルで、お互いに感謝しながらおいしく頂くことが、子ども達の楽しみにもなっている。食への関心が高い初等部の子ども達である。

II. 実践の概要

1. 児童観 (男子 8 名、女子 12 名、計 20 名)

授業の中で子ども同士が声をかけ合い、助け合う組である。日常生活にグループ学習を多く取り入れているため、集団の遊び、共同生活、一緒に働くことが得意である。また、縦割りの食事や掃除、大きな行事で助け合う中で、異年齢の子どもとの関りにも慣れている。

人数が少ない学年なので、今年は、1a の田んぼで稲作が行えるかどうか心配した。稲刈りは、保護者に助けて頂き、脱穀、精米、親子でお餅つきをすところまで、どの作業も一人が 2 倍以上働き、収穫量は例年とほぼ同じであった。気が良くて、働きた。

2. 学習観

(1) 指導の重点

(ア) 比べて考える

“比較する”を意識して 4 月から学習を進めた。

人口、面積、気温や降水量、自給率、生産量、等。比べることで、多い少ない、大小が決まる。また、比較する物によって大小の捉え方が変わるため、何と比べるのか、何を基準にするか、考えることが必要である。身近な物と比べると、より分かりやすい。

(イ) 人とのコミュニケーション

食の学習を通じて、更にコミュニケーションの力を付けるため、三つの異なる関わりを経験させた。①子どもの同士の話し合い、②専門家を訪ねてお話を伺う、③発表会でお客様に伝える、

準備した言葉を読むのではなくて、目の前にいる相手に、自分の言葉で伝える。真剣勝負の連続である。

(2) テーマの設定

夏休みに生産者を訪問して組で報告し合い、子ども達の興味は、様々な食材や加工品へと広がる。グループ学習では、食の捉え方をこれまでより広げ、「食で大切なこと」をテーマにして、探究学習を行った。

(3) 問いの設定

グループで最初の話し合いが、“問いを 1 つに絞り込む”こと。話し合いの仕方は、各グループに任せた。意見を出し易いように、自分の思いを紙にまとめてからグループに分かれた。

問いが決まれば、誰が何を調べるか、いつ頃どこへ訪問するか、次へと動き出す。

3. 学習の流れ

大きく三つに分けて計画

- ① 「食の元を探る」 個人、
- ② 食の探求学習 グループ
- ③ 発表会

(1) 「食の元を探る」 個人

朝の生活整理で、係の子どもがその日の献立を読み上げる。食材は何か、どんな栄養があるのか、食の話で一日が始まる。

一学期、家庭科では、お茶の葉やヨモギ摘み、摘んだヨモギで草団子作りをした。社会科では、ワカメ漁を手伝う学部生に漁業の方法や漁師さんの仕事について話を伺う授業もした。食に関する学習を進めながら、夏休みの課題の準備に入る。自分が興味を持つ食材の一つ調べ、生産者を訪ねてインタビューをする。それを、模造紙1枚にまとめるのである。

事前に、見やすいまとめ方(構成や字の大きさ、出典の記入や感想を入れること)と、生産者への連絡の仕方やマナー、話し方について学習してから夏休みを迎えた。

プロから直接話を伺った子ども達は、伝えたい事を体いっぱい抱えて新学期に登校してきた。直ぐに報告会を開き、組全員で聞き合う。見聞きした事を原稿なしで次々に話す子ども達の様子から、生産者のご苦労や仕事の大変さ以上に、楽しさや遣り甲斐を受けとめている事が伝わってきた。小学生を相手に、真剣に仕事の話をしてくれる大人の姿から、緊張し、責任を感じて、全力で聞き取った様子が見て取れた。興奮と喜び、初めての学びの体験である。

(2) 「食の探究学習」 グループ

夏に体験した学びの発展として、グループで探求学習を行う。取り上げる内容を食に関する事全体に広げ、調べたいことを出し合い、9つグループに分かれた。

「食で大切なことは何？」と問うと、「水、おいしさ、衛生、保存、人(生産、消費)、外国との関係」という答え。夏に自分が取材した食材から答えを出した子どもが多かった。調べるテーマが変わると、「食に大切なこと」がどのように変わるのか？

(グループと主な訪問先)

- ・宇宙食 尾西食品
- ・病院食 食糧部、健康管理室、田無病院、他

- ・保存食 食糧部と学園の備蓄倉庫の見学、セイショップ
- ・お茶 ルピシア大泉店
- ・チョコレート シェルダンバール
- ・果物の皮 一富士フルーツ
- ・寿司 竹寿司
- ・オーガニックと農薬、イギリスとの違い 友人の父母
- ・スポーツ選手の食事 西武ライオンズ

学習の流れは、問いの設定⇒調べ学習⇒検証(訪問、インタビュー)⇒まとめ⇒食について改めて考える

毎時間、振り返りカードに“困っている事、必要な資料、次の時間にすること”を記入して提出する。3,4年生が使用している物を参考にした。このカードにより、子ども達の様子が分かり、手掛かりになるような資料や話題を提供することが出来た。子ども達自身もこのカードを書くことで、次にすることの準備が出来たようだ。

進めていく中で、グループで思いが共有出来ないことがある。伝え合いが上手くいかないことや、言えずに黙ってしまうこともある。子ども達に任せ、見守った。気持ちや意見を口に出して話し合うしか、先に進む方法は無い。話し合いの場と時間を増やした。他のグループの取り組みを参考に出来るよう、掲示を作った。話し合う時に、お互いの顔が見える座り方を提案した。



図書館で借りてきた関係資料を、60冊ほど教室に置く。難しい資料は、図書館に相談して探してもらった。殺菌方法、食材による殺菌温度の違い、果物の皮、農薬の成分など。教室から、チョコレート会社や果物店に電話でインタビューをした。缶詰の保存方法は、教室でyou tubeを観た。世界の食材や産地を調べ始め、外国の資料や大小の地球儀を教室に置いた。

ベネズエラってどこ？と子どもが声を上げると、周りの子ども達も一緒になって探す。チョコレートの名前“ガーナ”が国の名前だと分かり、組で盛り上がることもあった。自分のグループだけではなく、周りのグループとも情報交換をしながら学びが進んでいった。

訪問の予約は、教室から子ども達が電話でお願いをした。断られても丁寧に敬礼を言う練習もした。受け入れてくださったお店や会社の方々は皆、大人の訪問と同じように対応してくださった。レジュメを用意してくださった方、応接室で様々な商品も見せてくださった会社など、子ども達のために、時間を取り丁寧に話してくださったプロの方々の対応で、子ども達の本気度が一気に高まった。模造紙1枚に、これまでに集めた情報から選んでまとめ、組で中間報告会を行う。そして、改めて「食に大切なことは、何？」と質問した。子ども達の答えは、“安全、栄養、きれいな水、人、育てること、環境”。“今、自分が向き合っているテーマで、「大切なこと」が決まる。殆どの子どもが、前回と違う答えをしたが、出てきた言葉は、同じようなものになった。

(3) 発表に向けて

自分達が楽しんで伝えられる方法を考える。1、2年生にも興味を持って聞いてもらえる工夫をして欲しいと呼び掛け、ニュース風、人形劇、ペープサート、大型絵本、ボード、マグネットで物を動かしながらの説明等を工夫した。果物の皮の効用調べが進まなかった子ども達は、皮と実の間に栄養があることを聞き、発表の中心をそちらに変更。お寿司屋さんで話を聞いて改めて興味を持った児童は、報告内容を“外国と日本の寿司の違い



“から、‘回転ずしとお寿司屋さんの比較’に変更。

それぞれ、発表に向けて調整をしていった。

(4) 発表当日

発表は、目の前に座るお客さんとの対話形式で行った。始めは恥ずかしそうにしていたが、2回、3回と続けることで、原稿に頼らずに話すことが出来るようになっていく。観客である保護者が真剣に耳を傾け、説明不足の所は質問で補ってくださった。保護者の姿勢が、子ども達の力を引き出してくれた。満足した表情の子ども達。人と人が言葉で伝え合う楽しさを味わった一日だった。

4. 児童の変化

日々の生活経験の積み重ねと子ども自身の成長もあり、以前にも増して学習に意欲的になった。一緒にいると楽しくて気持ちが安らぐ組。週1回の集団遊びでは、時々言い合いをしながら、ぶつかり合って仲良くなっていった。

日常の中でも少しずつ、止めて欲しい事や嫌だったことを我慢せずに伝えられるようになってきた。話してみたら分かってくれたという経験が、組全体の雰囲気や以前より更に温かいものに変えていった。

III. 考察、課題

・「カロリー」をキーワードに、グループ同士で比較が出来た。初等部1食のカロリーを基準に、病院(子ども、お年寄り)、高齢者施設、宇宙食、非常食、スポーツ選手の食事、男子部の数値も聞きに行き、グループで調べている食のカロリーと比べた。食糧部や家庭科の教師が「栄養素とカロリー」について授業をしてください、今回の探究学習の中で、唯一、全員で学んだ授業となる。

・食の範囲を広げ過ぎて、組全体の共通の学びとして学習を進めることが出来なかった。既習内容を更に深めるようなテーマに設定しても良かったと感じる。

・二月に、公害の学習で水俣病を取り上げた。工業も食と繋がりがあがり、生活や命に影響を与えることがあることを学ぶ。関心を持たれたご家庭より様々な感想や情報を頂き、それが子ども達の学習意欲や関心へと繋がった。以前よりも、親子で学習内容について話す機会が増えた。

・一年のカリキュラムを終えたところで、「食に大切なことは何か？」と最後に質問したかった。休校に入り、それが出来なかったことが悔やまれる。

食の中には、まだ知らない世界がある。各国の食材や食文化、そこに携わる仕事、生活や環境など、それぞれが繋がっていることを意識して、更に興味や関心を持って学びを広げて欲しい。



IV. 子どもの振り返りから（抜粋）

- ・伝えるための工夫もたくさんした。難しかったけれど、苦労を積み重ねていいものになった。
- ・話がそれた時に、いろいろ言われたくなくて我慢した。注意出来なかった。意見を出し合う事を学んだ。
- ・（発表を）やっていくと同時に、どんどん改良して行って、より良いものにしていった。
- ・（他のグループの発表から）栄養に興味を持つようになった。
- ・産婦人科の食事を調べてみたい。色々な病院の共通点も考えたい。
- ・非常食、保存食を食べずにすんでいる毎日が、ありがたい事だと思うようになった。

V. 参考図書

- ・富山和子『川は生きている』講談社青い鳥文庫、1984年
- ・富山和子『森は生きている』講談社青い鳥文庫、1984年
- ・富山和子『お米は生きている』講談社青い鳥文庫、2013年